様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月 12 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号： 20500530
研究課題名（和文）合気道の形成過程に関する研究：海軍大将竹下勇関係文書を中心に
研究課題名（英文）A Study of the Developmental Process of Aikido: Focusing on the Documents of Japanese Imperial Navy Admiral Isamu Takeshita

研究代表者
志々田　文明（SHISHIDA FUMIAKI）
早稲田大学・スポーツ科学学術院・教授
研究者番号：80196378

研究成果の概要（和文）：
竹下勇日記及び「乾」の巻解読によって以下の事実が明らかになった。1）植芝盛平が 1926、1927 年頃において指導した武術名は大東流柔術であった。以後 1928 年に相生流合気柔術、1929 年に合気武術、1933 年頃には合気武道へと変遷した。2）1930 年頃から柔道、剣道、唐手等の著名な武術家の竹下勇訪問があり、植芝の武術への他武術の影響が示唆された。3）1635 手の技術があり 66 の格闘形態が想定されていた。その七割強が相手に組み付かれた状態、組みつこうとしたときが想定されていた。4）植芝の武術はかなり実戦・実用的なものと理解された。

研究成果の概要（英文）：
Upon deciphering Isamu Takeshita's diary and the scroll known as "Ken", the following points were elucidated. 1) It was "Daito-ryu Jujutsu" that Morihei Ueshiba taught in Tokyo circa 1926 or 1927. The name of Ueshiba's martial art changed from "Daito-ryu (Aiki) Jujutsu" to "Aioi-ryu Aiki Jujutsu" in 1928; to "Aiki Bujutsu" in 1929; and to Aiki Budo around 1933. 2) The visit of prominent Judoka, Kendoka and Karateka suggests that other martial arts systems will have influenced Ueshiba's martial art. 3) The number of techniques taught by Ueshiba was 1,635. The number of patterns of fight was supposed to be 66, of which more than 70% were cases of being grasped or of trying to grasp. 4) Ueshiba's martial art was suited to practical use.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学　/ 身体教育学
キーワード：合気道、竹下勇、大東流合気柔術、乾坤

１．研究開始当初の背景

研究者にとって、戦後に急速に普及した合気道の概要を簡潔かつ明確に語ることは容易でない。その最大の理由は、合気道の形成過程に関する事柄を記す第一次史料が資料集や著書のような形で刊行されていないことにある。このことは例えば柔道において明治時代から『国士』『柔道』『有効の活動』などの月刊誌がほぼ継続的に刊行され、当時の関係者の論説や記録が残されている状況と

比較すれば明らかであろう。このような事態の主な原因は、合気道流派の並立とその閉鎖性、つまり合気道界の近代化の遅れにある。流派の並立は、普及を巡っての競争・対立を生む。そのため、ある流派が自らの正当性を主張するために、時に歴史を歪曲する可能性が生じることになる。筆者はこれまで一次史料が乏しい研究環境の中で、関係資料の精読・比較と聞き取り調査とによって合気道史の研究を行ってきた。そうした成果は『合気道教室』（大修館書店、1985）の「合気道の歴史」を皮切りに、『平凡社大百科事典』（1985）、『最新スポーツ大事典』(大修館書店,1987)、『Aikido, Encyclopedia of World Sport』（ABC-CLIO,1996）等によって明らかにしてきた。一次史料を欠く歴史叙述の危うさは、筆者自身が絶えず自覚し、残念に思うところでもあった。ところが 1991 年頃、筆者は、戦前の合気道揺籃期の様子とその後の展開を克明に語った海軍大将竹下勇の日記の重要な部分を、コピーと手書きの形で入手することができた。竹下勇日記には、合気道戦前期の様子が克明に語られており、1925 年の記事には、竹下が学んだ武道が合気道という呼称ではなく、大東流（柔術）であることがはっきりと記されていた。竹下は、「合気道開祖」として戦後に喧伝された植芝を東京に上京させ自ら後援会長として合気道揺籃期を支えた功労者である。竹下勇日記によっていままで曖昧だった部分が一気に明確となった。翌 1992 年に筆者は、日記のごく一部を用いて「『海軍大将竹下勇・武術日記』と大正１５年前後の植芝盛平」（武道学研究 25(2):1-12, 1992）を執筆した。その後、別の研究に従事した十四年の歳月を経た 2006 年には、ISHPES（体育・スポーツ国際史学会）リュブリャナ大会において研究報告（2006.8.26）した。またその内容を加筆修正し論文「The Process of Forming Aikido and Admiral Isamu Takeshita: Through the Analysis of Takeshita’s Diary from 1925 to 1931」を執筆し、ISHPES に投稿した（Shishida, Fumiaki, The Process of Forming Aikido and Admiral Isamu Takeshita: Through the analysis of Takeshita’s diary from 1925 to 1931, International Journal of Eastern Sports & Physical Education, Vol.6 No.1: 76-93)。この研究によって、1)1926 年から 1931 年までに流派名が改称されたこと、2)相生会という後援団体の変遷、3)柔道に対抗する技法研究の存在及び柳生新陰流指導者との交流関係の三点が明らかとなった。以上は竹下日記の一部を用いての研究成果であったが、その全体は未だ解読されていなかった。筆者はこれまで専門家による読解補助を含めて時間をかけて解読してきたが、竹下日記はペン書きの草書体で書かれ、難解な箇所があるため、全体を完全な形で完成することができないでいた。

竹下勇は日記のほかに植芝盛平から学んだ武術の内容を整理した文書を作成していた。武術覚書ノート「乾・坤」二冊（1930）である。本史料は、古武術研究家であった故武藤正雄氏からかなり以前にそのコピーの寄贈を受け、秘蔵していたものである。この史料は、植芝盛平が東京に居住してから三年間の間に日々書きためたメモで、大学ノートに記されている。これによって合気道揺籃期の植芝盛平の当時の技法の内容を克明に理解することが可能となり、現在、合気道の正統な技法を巡って、様々な意見が交錯する中で、評価の規準を示す機能をもたらすものと思われた。また、柔道など他武道や柳生新陰流など他武術との技法比較を通して、他武道・武術との影響関係を見る上でも有効であろうと考えられた。筆者は当時「坤」の巻について、「対柔道」という小見出しの下に書かれた百数十もの技法が紹介されていることを発見した。そこで「対柔道」の技法分析から明らかになったものを、古流柔術の技法である柔道の古式の形（起倒流）の内容と比較し、その関連性について考察し、その成果は「柔道と合気道の技術的中核としての崩しの方法」と題して、2007 年 6 月 1 日第九回国際武道学術大会（於韓国龍仁大学校）において招待研究発表した。また、2007 年 8 月に行われた ISCPES（国際体育スポーツ史学会）と ISSA（国際スポーツ社会学会）との合同コングレス（於コペンハーゲン大学）においては、植芝盛平の技法と起倒流との関係についてより精細な研究発表「Counter Techniques Against Judo: The Process of Forming Aikido Circa 1930」（2007.8.3）を行った。この「坤」の巻については平成 19 年度までに史料解読をほぼ終えたため、「乾」の巻の解読が課題として残されることになった。

研究開始当時からインターネット上で合気道史について様々なことが言われてきた。何が真実か判然としない現状を考えるとき、本研究計画の進展によって、合気道史における学術的な研究基盤を確立することは客観的な合気道論を展開する上で有意義であると考える

２．研究の目的

本研究では三つの課題を設定した。(1)1931 年から 1949 年までの竹下日記の合気柔術・武術関係箇所の全部を原本から正確に解読し、全体のテキストを確定すること。(2)「乾」の巻の解読を行うこと。(3) 合気道史における両史料の意義と内容を解説した研究論文を執筆し、報告書を刊行すること。

３．研究の方法

本研究は草書体資料解読を中心とした文献解読研究である。以下では研究の計画を中心に述べる。平成 20 年度は「乾」の巻についての解読作業と文字入力作業を完成する。難解な文字については専門家に解読を依頼する。平成 21 年度は、竹下日記 1926 年以降に現れる植芝盛平と合気柔術・武術関係箇所のうち、未だ完全な解読を終えていない 1931 年から竹下が没する 1949 年まで武術関係箇所の全部を解読し、文字入力する。平成 22 年度は「乾・坤」及び「竹下日記」の解読作業を再度精査し、内容を確定する。また上記２点を合わせた報告書を刊行し、合気道史における両史料の意義と内容を解説した研究論文を執筆する。

４．研究成果

(1)竹下勇日記の解読によって以下の事実が明らかになった。1)植芝盛平の団体・合気会の後継者となった植芝吉祥丸が書いた詳細な伝記『合気道開祖植芝盛平伝』(1978/1999)においては、植芝盛平の武術が戦前に既に大東流柔術との関係が薄いとされていたが、植芝盛平が東京での指導を開始する 1926、1927 年頃において、その武術が大東流柔術であったことが明らかにされた。2)植芝の大東流合気柔術は 1928 年に相生流合気柔術と改称され大東流合気柔術からの独立が宣言されたこと。その後名称は 1929 年に合気武術、1933 年頃には合気武道へと変遷したことが具体的に明らかになった。3) 1930 年の嘉納治五郎の植芝盛平訪問及びその武術の見学、著名な柔道家の訪問があり、柔道界が少なからざる関心を抱いていたことが明らかになった。4)戦前、新陰柳生流の下条小三郎、神道無念流の中山博道、沖縄唐手の船越義珍ら一流の武術家が竹下勇を訪問し、交流をもったことが明らかになった。5) 竹下勇は自ら植芝の後援会「相生会」などをつくって会長となり、海軍高官や財界人などに植芝の武術を紹介し、海軍関係学校、陸軍憲兵隊学校にこれを導入させた。相生会の存在についてはこれまでの資料で確認されていない。6)1940 年にはその組織を財団法人化してその武術の普及発展の基盤をつくったこと、その過程で指導者の育成が考えられていたことなどが確認された。

(2) 「乾」の巻解読によって以下の事実が明らかになった。 1)「乾」の目次では 1622 手の技術があるが、実際には 1635 手の技術であった。そこには 66 の格闘形態（一例。「前面より左手にて我右手首をとるとき」）が想定されていた。「乾」全体をみると、七割強が相手に組み付かれた状態、組もうとしてきたときを想定していることがわかった。現在植芝盛平の後継団体である合気会の合気道では、むしろ相手の攻撃を受け流す調和的技法が強調されていることを考えると意義深い内容といえる。2) 冒頭には「合氣の事」題された技術としての合気について言及した箇所があり、技術としての「合気」の存在が明らかになった。合気会においては、「合気」は「愛」としての精神性が強調されておりこの点も注目される。3) 唐手対抗技の存在が明らかになった。「乾」には「對唐手」と題した技術が 2 つ記されている。この他、打撃、当身による攻撃を想定した技術が 662 手記されていた。竹下勇日記解読によって船越義珍の竹下勇訪問が確認されているが、新興武道を創業しようとする植芝盛平が同じく新興の唐手を意識していたことが明らかになった。4) 本研究の開始以後、IT 情報によって、難波誠之氏を委員とする「竹下勇ノート復刻委員会」によって 2007 年に自費出版された『合気術秘伝：乾之巻・坤之巻合本』の存在が明らかになった。筆者等の研究と比較照合すると、『合気術秘伝』には、冒頭部の竹下の武道論の記述が抜け落ちていた。項目だけ列挙すると、「一、力の入れ方」、「一、研究者の心得」、「一、力の用ひ方」、「武藝者の心得」、「呼吸大事の事（息にあらず）」、「合氣の事」、「教導の心得」、「呼吸投の注意」である。また、『合気術秘伝』には誤読された箇所及び判読不明とされた箇所が確認された。

(3) 上記二点を合わせた報告書の刊行は紙媒体ではなく筆者の URL でなされた。合気道史における両史料の意義と内容を解説した研究論文は鋭意執筆中であるが平成23年4月末現在完成を見ていない。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 志々田文明「理想の柔道の追求とその継承：柔道における離隔態勢の技」，武術人類学研究，第 11 巻 1 号，pp.16-21，2011. 査読あり （Shishida, Fumiaki (2011) Jigoro Kano’s pursuit of ideal judo and its succession: Judo’s techniques performed from a distance, ″Ido Movement for Culture. Journal of Martial Arts Anthropology” Vol. XI (1): 16-21.）

② 工藤龍太・志々田文明「合気道における合気の意味：植芝盛平とその弟子たちの言説を中心に」（2010，体育学研究，55: 453-469），査読あり

③ 志々田文明「柔道における離隔態勢の技：嘉納治五郎の概念の期限と富木謙治

によるその実現」，アーカイブズ・オブ・武道，第6巻第4号，pp.165-172，2010.
査読あり（Shishida, Fumiaki (2010) Judo’s techniques performed from a distance: The origin of Jigoro Kano’s concept and its actualization by Kenji Tomiki, Archives of Budo, Vol.6(4): 165-172.），

〔学会発表〕（計３件）

① 志々田文明「柔道における離隔態勢の技：嘉納治五郎の概念の起源と富木謙治によるその実現」,第二回格闘技・武術世界科学会議，ジェシュフ大学(ポーランド)，2010年9月17日.(Fumiaki Shishida, Judo’s techniques performed while keeping distance: The origin of Jigoro Kano’s plan and its actualization by Kenji Tomiki, 2nd World Scientific ① Martial Arts, 17-19 September 2010, University of Rzeszów, Poland)

② 工藤龍太・志々田文明「合気道における合気の原初的理解イデオロギー的性格」国際スポーツ哲学会第36回大会，2008年9月12日，東京. (Kudo, Ryuta, Shishida, Fumiaki, The primary interpretation of “aiki” in aikido and the ideological nature, IAPS Conference 2008 in Tokyo, Japan, September 12, 2008.)

③ 志々田文明「近代日本武道の伝統と変容：柔道と合気道を中心に」国際スポーツ社会学会世界会議，2008年7月26日～29日，2008，京都. (Shishida, Fumiaki, The Invention and Acculturation of Modern Japanese Martial Arts: Focusing on judo and aikido, International Sociology of Sport Association World Congress (26-29 July 2008 in Kyoto, Japan)

〔その他〕
ホームページ等
http://sites.google.com/site/fshishidalab/

６．研究組織
(1)研究代表者
志々田　文明（Shishida Fumiaki）
早稲田大学・スポーツ科学学術院・教授
研究者番号：80196378